

新天地で国づくり求め

昭和6(1931)年9月18日午後10時半ごろ、旧満州の奉天(瀋陽)西北の柳条湖で満鉄(南満州鉄道)の線路が爆破された。これを中国兵によるものとした現地の日本軍(関東軍)は直ちに軍事行動を起こす。奉天をはじめ長春など満鉄沿線の都市を支配下に抱き、占領地域はやがて満州のほぼ全域に及んだ。

「満州事変」である。真相は満鉄及び沿線の日本の権益を守る立場にあった関東軍の参謀、石原莞爾らによって綿密に計画された「謀略」だった。軍事的天才と言われた石原の狙いは日本が満州を占領、共産化し

たソ連の軍事力への防波堤として、合わせて朝鮮統治の安定化につなげることにあった。石原が唱える「世界最終戦」にとっても、満州は欠かせなかったのだ。

しかし石原のこの構想はすぐに挫折する。日本政府はもとより軍の中央も関東軍の「独走」を認めなかった。石原らはやむなく「占領」から「満州独立」に方向転換する。翌7年3月1日、満州国が建国を宣言する。

五族協和をうたった満州国だったが、現実には治安や外交で関東軍の「内面指導」を受けらるることになっていた。日本の「傀儡」との批判は免れえなかった。国際的な風当たりも厳しく、政治的には苦難の門出だった。

だが一方で、新しい国の誕生は「五族」である日本、中国、朝鮮などの人々には「希望」ともなった。日本からも、「国づくりに」を求めて多くの人が満州に渡っていった。日本の商工省から満州国の実業

紅陵に命燃ゆ

荒野に理想の学園村目指す

第8章 山田悌一と満州



防寒服姿の山田悌一
—野田美鴻氏『先師録』から

部次長に転身、産業開発5カ年計画を推進した後の首相、岸信介や、特殊法人の満州重工業開発を設立した経済人、鮎川義介らが知られる。だがもう一人、教育の分野で満州国の発展に寄与するため、荒野に新たな学校を建設した教育者がいたことも忘れてはならない。山田悌一である。

将来は総合大学の夢も

山田は宮崎県出身で、大正4

年に東洋協会専門学校(現拓殖大学)支那語科を卒業している。すぐ中国大陸に渡り、満蒙独立運動にも参加、帰国後は国士館専門学校(現国士館大学)の設立に参加するなどした。

しかし昭和7年に満州国が独立するや、いたたまれないように渡満し学園設立に邁進する。時間的には前後するが、この年の11月に発表された徳富蘇峰(言論人)、内田康哉(元外相)、頭山滿(玄洋社指導者)といった錚々たるメ

ンバーによる設立趣意書に添えた学園規定がある。まず目的を「大亜細亜主義を抱懐する青年を陶冶鍛錬し満州建国の理想成就に献身すべき模範的人材を養成する」と定める。

事業として、その目的を達成するため農業を中心に所定の課程を体得させ、「自給自足と協力を原則とせる理想的学園村」を建設経営するとしている。武者小路実篤が大正7年に建設した「新しき村」を思わせる。理想郷をつくりたいとの意気込みが感じられる。だが、山田が満州国総務長官、駒井徳三に出した建白書によれば、将来は師範部や各専門部を設け、総合大学に発展させる計画も持っていたという。

学園の建設地は満州国の首都、新京(長春)から東へ約300キロほどの鏡泊湖畔に、校名は満州鏡泊学園と決まった。鏡泊湖は黒龍江省の牡丹江と吉林省敦化との中間あたりにある琵琶湖の7分の1ほどの湖だ。

昭和7年10月には満州国文教部の正式な許可を得て、8年3月には第一期生の入学試験を東京で行い、約200人を選んだ。彼らは8月に日本を出発、新京から敦化に着いた。しかし鏡泊湖周辺は当時、満州でも最も治安が悪かった。しかも冬季に向かうため関東軍が許可を出さず、そのまま

満州国自治指導員 東洋協会専門学校(拓殖大学)からは、その中国語の語学力もあって多く卒業生が満州に渡っている。その1人で昭和4年に卒業した友田俊章は、満鉄社員、笠木良明が組織した大雄峰会に所属、さらに笠木の提案で満州国に設置された自治指導部

満州国自治指導員

に参加した。自治指導部は中国東北政権の崩壊で一時無政府状態になった満州の地方に、自治による地方政府の再建を目指し、各地に自治指導員を派遣した。友田も一期上の宮崎専一とともに指導員となったが、地方で受け入れられるのは困難で、昭和7年10月、赴任先の鳳城県で殉職した。

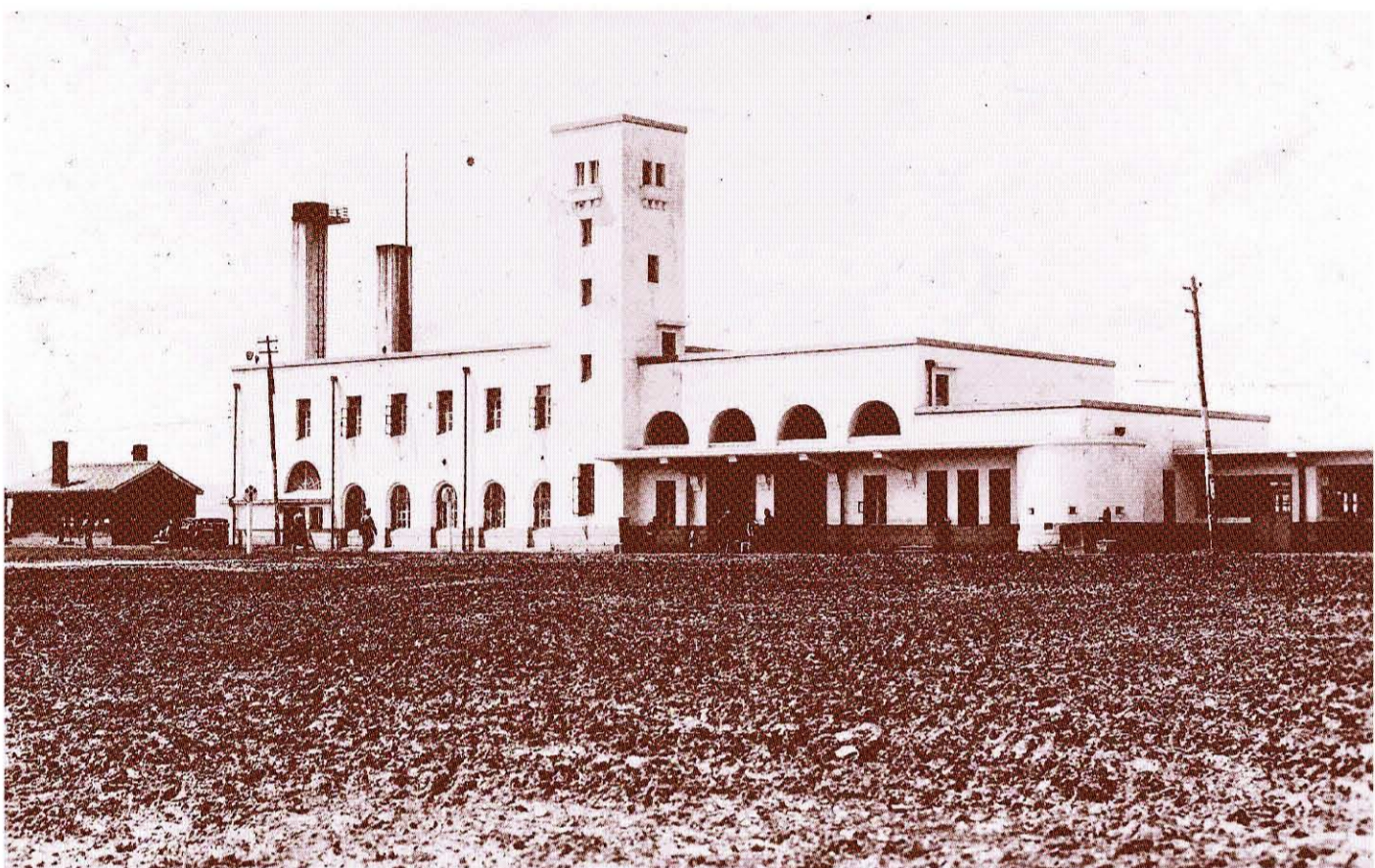
昭和7年10月には満州国文教部の正式な許可を得て、8年3月には第一期生の入学試験を東京で行い、約200人を選んだ。彼らは8月に日本を出発、新京から敦化に着いた。しかし鏡泊湖周辺は当時、満州でも最も治安が悪かった。しかも冬季に向かうため関東軍が許可を出さず、そのまま

野田氏によれば、農作業も建築工事も「楽しい雰囲気」の中で予定通り、あるいは予定以上に進行しているように見えた。建設地の近くには関東軍が駐屯し、学生たちも夜は銃を持って歩哨に立った。だがそんなことも忘れさせるような「平和な湖畔の明け暮れ」だったという。

その平和が突然破られたのは、昭和9年5月16日のことだった。買収した土地の登記手続きや各方面へのあいさつのため県庁のある寧安へ行った山田らの一行が武装勢力に襲われた。山田も42歳の命を落としてしまったのだ。

支柱を失った鏡泊学園は財政的にも理論的にも行き詰まり、挫折を余儀なくされる。一部の残留者で塾と「学園村」をつくり、周辺の住民たちにも溶けこみながら農業を営んでいく。それは昭和20年の終戦にまで続いたという。

満州の大地に大学や村をつくるという山田の夢は、はかなくついに消えた。だがその理念はいつまでも語りつがれてもいい高いものだった。(毎週土曜掲載)



昭和11年ごろの牡丹江駅。満州鏡泊学園はここから牡丹江を数十キロ南へさかのぼった鏡泊湖畔に建設された



文・皿木喜久

題字・藤渡辰信